

UNIVERSITY OF KOCHI

学生の「エンゲージメント力」を育み、 地域社会へ関与し続ける

高知県立大学とSDGs

高知県立大学は、1945年に創設された高知県立女子医学専門学校を源流とし、高知女子大学を経て、75年の歴史を重ねてきました。この学び舎に集う学生たちは学びに憧れ、教員たちは高い志を持って教育研究に取り組む、職員たちはそんな学生や教員たちを支えてきました。その中で、「学生中心の教育」「一人ひとりの学生が自己実現するための教育」「地域志向の教育」という伝統を育んできたのです。

一方で、課題先進県の高知県にあつて、創基当初から地域課題の解決に努力してきました。第二次世界大戦の戦禍、昭和南海地震や毎年のように襲ってくる台風の被害、男女共同参画社会の実現、子どもたちの貧困、中山間地域の深刻な過疎化、高齢者の孤立、そして人口減少…。近年は、災害看護や地球規模の環境問題、マイノリティの教育問題といったグローバルな視点での研究や、課題解決に向けて現地で活動する教員や大学院生もいます。すべての教職員が、県立大学としての使命を自覚し、時代や



学長 野嶋 佐由美
高知県立大学法人 高知県立大学

地域を超えて、これらの課題に立ち向かってきました。現在は教職員だけではなく、学生も同志となつて、地域課題の解決に主体的に取り組んでいます。学生たちは、自分が生まれ育った場所でも、自分のふるさとと同じように地域を想い、奮闘しています。

高知県立大学が大切にしているのは学生の「エンゲージメント力」を養う教育です。「エンゲージメント」とは「つながり」「関与」と訳されるマーケティング用語で、現象に関与する力のこと。関与するためには的確な状況分析能力やそのための方法論が身に付いていなければならず、関与するにあたっては交渉力やコミュニケーション力も必要です。高知県立大学には少人数教育やアク

ティブ・ラーニング、フィールドワークなど学生がエンゲージメントする力を付けていく教育環境が整っています。各学部が行っている「学生の主体性を大事にする教育」を「層発展させる」ことが、課題解決への

貢献につながると思っています。このような営みの中で、平和を愛し、一人ひとりを大切にするという理念のもとに「女子大DNA」と呼ばれるレガシーを培ってきました。それは、誰一人取り残さないための、次世代に大切なことをつなぐための考え方や知識、技術です。今、SDGsの17のゴールと169のターゲットを見ると、私たちの先達が培ってきたレガシーが、SDGsの取り組みと多くの点で共通していることを改めて認識しています。そして、私たちはSDGsの達成のために、地域と連携し、世界の人々とともに歩むことができることを確信しています。高知県立大学は、教育、研究、社会連携を通じて、SDGsの達成に向けて取り組んでまいります。

地域と大学の新たな関係 ——域学共生という考え方

全国と比較して、高齢化で10年、人口減少で15年先行している高知県。少子高齢社会や南海トラフ地震対策など山積する課題を乗り越えて、未来の社会をどう形成するか、学生と教職員も真剣に取り組んでいます。その中で生まれた新しい理念が「域学共生」です。地域と大学が互いに手を携え、教え合い、学び合い、育ち合いながら、地域の再生と活性化を実現するために、共に生き、生み出すという考え方で、高知県立大学はこの理念のもとに、学部生全員が地域に入つて社会の人々とともに学び合う教育を取り入れています。

「域学共生」に参画することは、この国を変える挑戦に参画すること。「誰一人取り残さない」ためには、本当に困っている人は



どこにいるのか、そのために動くにはどうすべきかを考えなければなりません。地域の課題解決や活性化に向けた取り組みを教育プログラムとして行うことで、地域の課題に関心を持ち、積極的に参画する意欲と能力を有する人材を育成し、持続可能な社会の実現を目指しています。

地域課題に挑戦する学生主体 のプロジェクト「立志社中」

地域の課題解決に取り組む教育プログラムの1つとして実施しているのが「立志社中」プロジェクトです。日本で、そして世界で通用する人材を育てたいという想いを込めて、坂本龍馬の「亀山社中」(のちの海援隊)と板垣退助らの「立志社」を合わせ、「将来の目的を定めて、これを成し遂げようとする学生グループ」という意味で本事業を「立志社中」と名付けました。

「立志社中」は、地域と関わる演習、フィールドワーク、研究室・学生活動などの実績を土台にしながら地域活性化に取り組む学生主体のプロジェクトを公募・審査し、支援するものです。

募集対象は、「域学共生」を目的として学生グループが主体的に企画・実施し、かつ成果が見込まれるプロジェクト。学生たちはまちづくり、中山間地域の活性化、地域文化の継承・再生、産学連携、地域医療・福祉、小・中・高大連携などを図りながら、地域文化の振興・再生や地域の課題解決のために意欲を持って取り組みます。大学からは1プロジェクト30万円を上限とする活動資金の助成、活動の相談・指導、広報などの活動支援、スキルアップのための講座の実施などのサポートを行います。

プロジェクト開始時の参加学生は6チーム102名でしたが、2019年には8チーム290名へと広がり、活動は年々充実し活発化しています。健康栄養学部で管理栄養士を目指す学生たちが参加するプロジェクト「それいけ！大野見エコ米」No Rice, No Life」は、日本人の主食である「お米」の美味しさを伝えたい！という思いで、中土佐町大野見地区で環境に配慮して育てられている大野見エコ米の栽培のお手伝いやPR活動を行っています。また、



看護学部の学生が中心となつている「健援隊」プロジェクトでは、日曜日でのAED・胸骨圧迫講習や中山間地域でセルフケアを推進する活動をしています。学生たちは地域で自身の専門性を活かし、地域で専門性を磨いているのです。

そして今、新たな展開として、「立志社中」の中から、自ら活動資金を調達したり外部資金を獲得して、大学からの助成金を必要としなくなった団体が現れてきています。活動を継続させるにはそうした自立が必要であり、学生たちが将来社会に出て活動するときの練習としても、地域との共生としても望ましい形であるといえます。学生たちが見せてくれる「域学共生」のあり方は、今後ますますに発展していくでしょう。